

# 岩熊力也展 Weight

Iwakuma Rikiya Solo Exhibition “Weight”

2014年1月6日(月)–1月18日(土) コバヤシ画廊企画室

---



関係者各位

時下ますますご清祥の事と存じます。

いつも大変お世話になっておりました誠に有り難うございます。

この度、年明けの恒例の岩熊力也展「Weight」を開催致しますので、ここにお知らせ致します。

会期は2014年1月6日(月)~1月18日(土)です。

岩熊の絵画は、デビューの頃から木枠に張った透過性の高い布を支持体としていますが、近年はアクリル絵具でつけてはその大半を水で流しながら描くという独特の手法を用いています。

今回は昨年に発表した「LAUNDRY」シリーズ同様、木枠を用いずリネンのみを用いています。

布に故人の顔を描き、その布を洗い流し、わずかに絵の具の痕跡をとどめたものを、去年はピンチとひもを使って洗濯物の様に画廊内に展示しましたが、今回は同じ様に制作した布をワンピースに仕立てた作品や映像を用いたインスレーションを画廊内に展示いたします。

どうぞ送らせていただきました資料をご査収の上、貴社刊行の出版物にご案内御掲載をご検討頂ければ幸いに存じます。

コバヤシ画廊企画室



2013年「LAUNDRY」コバヤシ画廊個展



2013 「LAUNDRY」 第一生命南ギャラリー個展

■展覧会一般情報■

展覧会名 岩熊力也展 「Weight」

会 期 2014年1月6日(月)ー1月18日(土)  
日曜休廊・祝祭日開廊

開廊時間 A.M.11:30ーP.M.7:00  
但し最終日は5時まで

※初日午後5時30分よりレセプション

会 場 コバヤシ画廊企画室  
東京都中央区銀座3-8-12 ヤマトビル B1  
TEL03-3561-0515 FAX03-3561-7859  
HP <http://www.gallerykobayashi.jp/>  
E-Mail [kbysg@gf6.so-net.ne.jp](mailto:kbysg@gf6.so-net.ne.jp)

展覧会「Weight」PV

[https://www.youtube.com/watch?v=m-ZPqz\\_PJ8&feature=youtu\\_gdata\\_player](https://www.youtube.com/watch?v=m-ZPqz_PJ8&feature=youtu_gdata_player)

■作家略歴■

岩熊力也 Rikiya IWAKUMA

1969 東京に生まれる  
1990 日本大学芸術学部映画学科中退  
1997 Bゼミスクーリングシステム修了  
2004 ポーラ美術振興財団国際交流プログラム(メキシコ滞在)  
2009 リトアニアに滞在。制作  
1996年よりコバヤシ画廊他で個展多数  
2011  
「Gas station Hamburger Queen」 第一生命南ギャラリー、東京  
「EL RIO DE LA LLUVIA」 BIBLIOTECA HENESTROSA、メキシコ  
2013 第一生命南ギャラリー、東京

主なグループ展

1999 「INDEX」 セゾンアートプログラム・ギャラリー、東京  
2000 「第16回平行芸術展」 エスパス OHARA、東京/  
2000 「INDEX」 セゾンアートプログラム・ギャラリー、東京/  
「MESSAGE」 コバヤシ画廊、東京 [以降毎年出品]  
2002 「VOCA展2002」 上野の森美術館、東京/  
2007 「「森」としての絵画」 岡崎市美術博物館、愛知/  
2008 「VOCA展2008」 上野の森美術館、東京<大原美術館賞>  
2009 「RAIN MEETS THE SUN」 M-Zilinskas Art Gallery、リトアニア  
2011 「アーティストファイル」 新国立美術館、東京  
2012 「El vacío y el paisaje」 Galeria AP. ハラバ、メキシコ/  
「La vida y la muerte, sus intermitencias」 Antigua colegio jesuita de patzcuaro. パツクアロ、メキシコ  
パブリックコレクション 大原美術

## Weight

「どうしてみんなぼくに期待するんですかね、ほかの連中には期待できそうにないことを？ どうしてぼくは耐えなきゃいけないんですか、だれもがまんできないことを？ だれにも背負いきれない重荷を、どうして、ぼくが？」

ドストエフスキー「悪霊」（亀山郁夫訳）、スタヴローギンの台詞より

Take a load off, Fanny

Take a load for free

Take a load off, Fanny

And you put the load right on me

The Band “THE WEIGHT” より

したがってわれわれは、死者たちのこともまったく忘れていたというのではなかった。ただ生存の維持のみを目的とする「ごっこ」の世界が、皮膚から露出した白骨のような死者の重みを受けとめられなかったというだけである。

～ 江藤淳 「ごっこ」の世界が終わったとき ～ より

2012年から制作している「LAUNDRY」のシリーズは死者の肖像画を水で洗い流し最後に草木で染める作品であった。震災、そして父の死を前にして、伝統を喪失し土地との繋がりも希薄になった日本人にはたして死者を弔うことができるのだろうか、縁もゆかりもない土地の火葬場で焼かれた父の魂はどこへ向かうのか、絵画はいまもまだ死者と生者をつなぐことができるのだろうか、そう考えたことがきっかけであった。ともかくそこで私は死者の罪や穢れを水に流し自然に還すということをやった。そして死生観をテーマとしたメキシコでの展覧会で展示した。いまや生者だけが埋め尽くすこの地上に死者たちの空間がひらければと思った。会期中メキシコは死者の日をむかえた。翌2013年秋、かつて占領軍によって接收されGHQ本部の置かれていた建物内のギャラリーではA級戦犯の肖像を水に流した。死者の罪を後世の人間が暴きたて批難するのはこの国の文化ではあるまい、そんな思いからであった。

だが、水に流された罪や穢れはどこに行くのだろうか。重荷を背負うものは誰なのか。

311後、またしても私たちが眼にしたのは、日本人であることが恥ずかしいと口にしながら他者批判を繰り返し、高みから正義を叫ぶ人々の群れであった。311以前には24時間煌々と灯りを照らし繁栄と平和を謳歌する日本人の一人であったことなど早くも忘れ、戦犯を見つけ出し吊し上げることに躍起となっている姿は1945年8月15日以降にあらわれた人々の群れの生き写しである。さっさと重荷をおろし、誰も彼もが被害者の顔をしてあぐらをかいている。だが歴史とは背負うものである。よそ者面をしてその上であぐらをかいているかぎり、また同じことを何度でも繰り返すはめになる。正義を絶対化したものの先にひらけるのは全体主義への道があるばかりではないのか。

今回、新たに派生した問いから生まれた「ハヤサスラヒメ」「バシー海峡」「ワンピース(鳥尾鶴代とチャールズ・ルイス・ケーティス)の3作品を中心にWeightと題して展示する。